

学齡前の子をもつ母親の役割葛藤 (第2報)

赤 星 礼 子・金 孝 心*

Role Conflicts of Mothers with Preschool-age Children (II)

Reiko AKAHOSHI, KIM Hyo-Shim*

1. 研究目的

前報¹⁾においては、学齡前の子をもつ母親の役割葛藤のあり様を、就業の有無を分析軸として解明を試みた。その結果、就業している母親は、専業主婦の母親と比較すると、母親役割と妻役割の遂行においてより葛藤を生じやすく、一方、専業主婦は時間管理においてより葛藤を生じやすいことが明らかになった。また、この分析過程から、学齡前の子をもつ母親には、学齡前の子がいるという家族の発達段階にあることでの役割葛藤があるのではないかという予測も見出した。そこで、本稿では、学齡前の子をもつ母親が役割葛藤を生じる場合の要因を、就業の有無も含めて究明する。

役割葛藤に関する先行研究をみると、選考された役割葛藤項目は本調査とは異なるが、

葛藤と満足度の関係について、「日本では葛藤ありグループがもっとも満足度が低い」(田村他, 1978)という結果を示しながら、「葛藤は必ずしも夫婦の関係を悪化させるとはいえず、絆を強めるきっかけになる場合もあると考えられる」(中間, 1991)²⁾との指摘がある。

また、夫婦の幸福度に関する研究において「結婚後7年目から10年目の妻の幸福感が特に低い」(NHK調査, 1985)ことから、「この時期の妻は育児のために家庭に足止めされているか、仕事に就いていれば、それと家事・育児との加重負担にあえいでいるかのいずれかである」(川崎, 1991)³⁾との推察もなされている。

これまでのところ、役割葛藤と生活満足度、そして結婚幸福度の関係については十分な説明はなされておらず、また本稿においてもそ

* 済州教育大学

の任には耐えられない。しかし、先行の諸研究から分かるように、役割葛藤が生活満足や幸福度などと共に結婚生活の情緒構造と強い関連があることが推測できる。

そこで、本稿が、学齢前の子をもつ母親について、その役割葛藤が生じる要因を解明することは、結婚生活における夫婦の役割関係と情緒関係をよりよくするための提言を生み出すことになると考える。

2. 分析方法

(1) 分析方法

本稿の分析対象となるサンプルは、前報と同じものであるが、9つの役割葛藤項目に全て回答した526名である。

サンプルは、9つの役割葛藤項目に対する回答を5段階評価で得点化し、全サンプルを4分割し、最も得点の低い・葛藤の小さいグループを「葛藤下位群」とし、最も得点の高い・葛藤の大きいグループを「葛藤上位群」

とした。この葛藤下位群と葛藤上位群の属性や生活意識を比較することで、母親の役割葛藤の要因を探ることにする。

(2) 葛藤下位群と葛藤上位群

図1のヒストグラフに示すように、葛藤下位群は、得点が11~22点の129名(全体の24.5%)とし、上位群は、29~40点の142名(27.0%)とした。

つぎに、図2に示すように、9つの役割葛藤項目の全てにおいて、下位群はより高い評価をしており、上位群はより低い評価をしている。(林式数量化II類を用いて、葛藤下位群と上位群の判別の中率を算出した結果、95.8%という高率であった)。

また、役割葛藤項目の評点の平均値は、夫の妻理解・人間関係への評価が、両群とも他の項目の評価よりもやや高めで、また、下位群の夫の家事参加への評価が低めであるが、下位群では、「はたしている」(2.0)のレベルにあるが、上位群では、「ふつう」(3.0)と「十

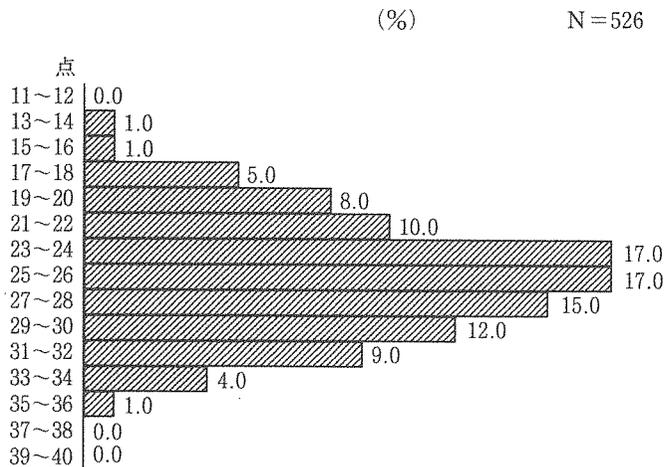


図1 役割葛藤の得点分布

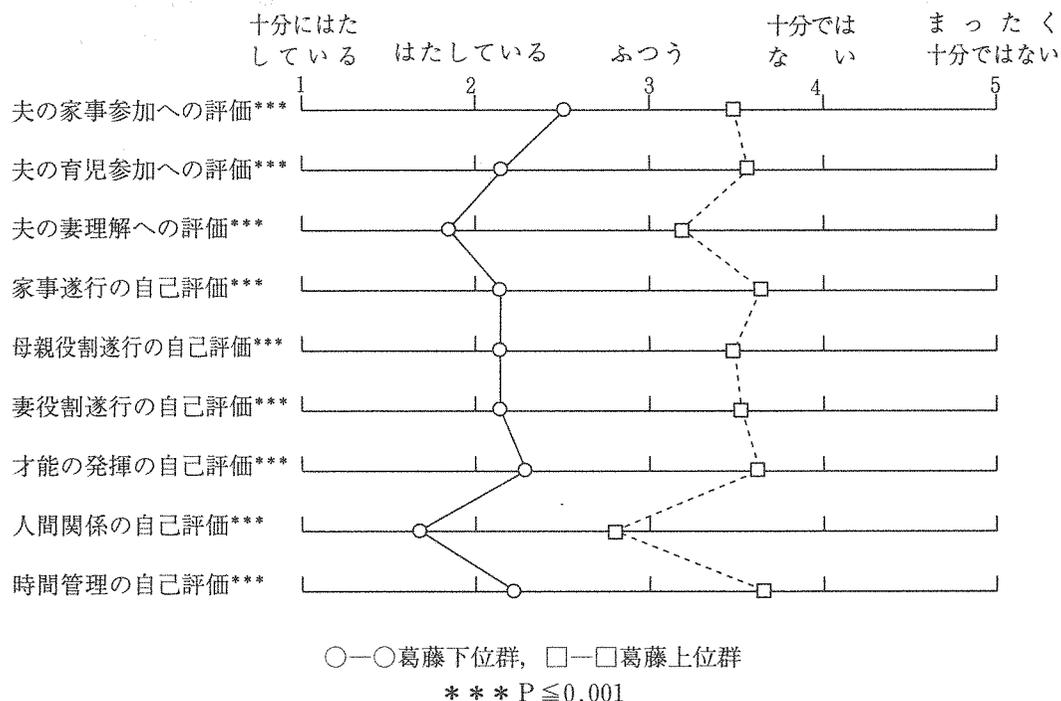


図2 葛藤群別の役割葛藤項目の評価

分ではない」(4.0)との中間程度である。(したがって、葛藤群の弁別力をもつ項目のレンジの値は、0.1641~0.2809と範囲が狭い⁽⁴⁾。)

なお、9項目間の相互関連は、夫の家事参加への評価と人間関係への自己評価の間を除けば強い関連がある。

以上のように、9つの役割葛藤項目への評点によって葛藤群を分けることは適切であると考える。

3. 分析結果

(1) 葛藤群と属性

役割葛藤群と母親に関する属性との関係は表1に示す通りである。

まず、母親の年齢については、各葛藤群の年齢階級別の構成割合の差は極めて小さい。

また、母親の平均年齢も、下位群33.37才、上位群33.31才と差は小さい。本対象者の年齢幅の中では、母親の年齢が役割葛藤に与える影響は小さいといえよう。配偶者である夫の年齢も、平均で下位群36.34才、上位群35.87才とやや下位群が高いが、その差は小さい。

そこで、各葛藤群の結婚経過年数の階級別構成割合をみると、これも極めて似通っている。平均結婚年数も、下位群9.44年、上位群9.23年である。

母親の学歴は、葛藤上位群の方がやや高学歴者が多い程度の違いである。一方、夫の学歴は、葛藤群による違いはほとんどない。

つぎに、世帯構成をみると、核家族世帯率は、葛藤下位群では65.1%、上位群は62.0%、三・四世代世帯率は、下位群34.1%、上位群

	実数 (%)	
	葛藤下位群 129 (100.0)	葛藤上位群 142 (100.0)
妻の年齢		
20～24歳	1 (0.8)	4 (2.8)
25～29	25 (19.4)	20 (14.1)
30～34	52 (40.3)	65 (45.8)
35～39	41 (31.8)	41 (28.9)
40～44	5 (3.9)	4 (2.8)
45～49	—	1 (0.7)
NA	5 (3.9)	7 (4.9)
夫の年齢		
20～29歳	16 (12.4)	16 (11.3)
30～34	37 (28.7)	39 (27.5)
35～39	41 (31.8)	63 (44.4)
40～44	31 (24.0)	20 (14.1)
45～59	4 (3.1)	3 (2.1)
NA	—	1 (0.7)
結婚経過年数		
0～4年	3 (2.3)	4 (2.8)
5～9	84 (65.1)	93 (65.5)
10～14	32 (24.8)	38 (26.8)
15～19	9 (7.0)	6 (4.2)
20～24	1 (0.8)	1 (0.7)
妻の学歴		
中卒	1 (0.8)	8 (5.6)
高卒	72 (55.8)	64 (45.1)
専門学校卒	11 (8.5)	14 (9.9)
短大卒・大学中退	22 (17.1)	32 (22.5)
大卒	14 (10.9)	18 (12.7)
NA	9 (7.0)	6 (4.2)
夫の学歴		
中卒	5 (3.9)	7 (4.9)
高卒	58 (45.0)	62 (43.7)
専門学校卒	6 (4.7)	10 (7.0)
短大卒・大学中退	1 (0.8)	6 (4.2)
大卒・大卒以上	50 (38.8)	51 (35.9)
NA	9 (7.0)	6 (4.2)
世帯構成		
核家族世帯	84 (65.1)	88 (62.0)
三・四世代世帯(夫方)	37 (28.7)	46 (32.4)
三・四世代世帯(妻方)	7 (5.5)	8 (5.6)
その他	1 (0.8)	—
世帯収入*		
15万円未満	4 (3.1)	15 (10.6)
15～20	17 (13.2)	28 (19.7)
20～25	31 (24.0)	27 (19.0)
25～30	25 (19.4)	14 (9.9)
30～40	16 (12.4)	19 (13.4)
40万円以上	13 (10.1)	8 (5.6)
NA	23 (17.8)	31 (21.8)

* P≦0.05

	実数 (%)	
	葛藤下位群 129 (100.0)	葛藤上位群 142 (100.0)
現在の就業の有無		
有業(就業母)	66 (51.2)	86 (60.6)
無業(専業母)	61 (47.3)	55 (38.7)
NA	2 (1.6)	1 (0.7)
就業理由(就業母)*		
生活費の不足を補うため	20 (29.4)	45 (51.7)
より豊かな生活のため	15 (22.1)	9 (10.3)
自己の能力・技術を生かす	11 (16.2)	11 (12.6)
社会活動へ参加したい	4 (5.9)	5 (5.7)
仕事に生きがいを感じる	5 (7.4)	2 (2.3)
家業なので	12 (17.6)	10 (11.5)
その他	1 (1.5)	5 (5.7)
就業継続意思(就業母)		
長く続けたい	20 (29.4)	16 (18.4)
当分続けたい	42 (61.8)	58 (66.7)
早くやめたい	3 (4.4)	11 (12.6)
NA	3 (4.4)	2 (2.3)
就業意思の有無(専業母)		
子供の成長後働きたい	37 (60.7)	31 (56.4)
今すぐ働きたい	6 (9.8)	12 (21.8)
働くつもりはない	18 (29.5)	10 (18.2)
NA	—	2 (3.6)
就業形態(就業母)		
フルタイム	18 (26.5)	38 (43.7)
パートタイム	29 (42.6)	27 (31.0)
自営業	18 (26.5)	14 (16.1)
内職	3 (4.4)	8 (9.2)
妻の職業		
自営業主・家族従事者	18 (26.5)	14 (16.1)
管理・専門職	11 (16.2)	15 (17.2)
事務職	14 (20.6)	16 (18.4)
労務・作業職	7 (10.3)	17 (19.5)
販売・営業職	16 (23.5)	19 (21.8)
その他	1 (1.5)	4 (4.6)
NA	1 (1.5)	2 (2.3)
夫の職業		
自営業主・家族従事者	25 (19.4)	27 (19.0)
管理・専門職	25 (19.4)	28 (19.7)
事務職	29 (22.5)	28 (19.7)
労務・作業職	23 (17.8)	24 (16.9)
販売・営業職	22 (17.1)	28 (19.7)
その他・無職	2 (1.6)	4 (2.8)
NA	3 (2.3)	3 (2.1)
夫の妻の就業への態度**		
賛成している	90 (69.8)	94 (66.2)
反対している	23 (17.8)	16 (11.3)
わからない	8 (6.2)	26 (18.3)
NA	8 (6.2)	6 (4.2)

* P≦0.05 ** P≦0.01

38.0%となっている。

世帯構成員数は、葛藤下位群に4人が多く(47.3%, 36.6%), 上位群では7人以上が多くなっている(18.3%, 10.1%)。

そこで、平均世帯構成員数は、下位群4.8人、上位群5.1人となっている。上位群の方がやや世帯規模が大きい。

さらに、子どもの数をみると、下位群の方が2人以下がやや多く、3人以上は上位群にや多い(40.1%, 32.6%)。平均の子ども数は、下位群2.32人、上位群2.42人と上位群が多いものの、差はごく小さい。また、末子の年齢は、上位群の方が2才未満層がやや多く(26.1%, 17.8%), 平均年齢も上位群2.9才、下位群は3.1才と、上位群の子どもの方が幼い。

最後に、役割葛藤群と世帯収入階級との関連をみると、世帯収入が25万以上の世帯は、葛藤下位群では41.9%であるのに対して、上位群では28.9%と少ない。つまり、葛藤上位群では比較的収入が低いということになる。

以上のように、母親のもつ種々の属性は、世帯収入を除いて母親の役割葛藤に与える影響はきわめて小さい。これは、分析対象者を学齡前の子をもつ母親というように家族の発達段階を限定しているため、各属性がかなり均一化している面もある。したがって、学齡前の子をもつ母親にとっては、学歴や世帯構成、子ども数などは、その役割遂行において葛藤を生む直接的な要因とはならないが、世帯の収入はより直接的な影響をもつといえよう。

(2) 葛藤群と母親の就業

母親の就業の有無については、表2に示す

ように、葛藤下位群では、有業者は51.2%であるが、上位群でも60.6%である。上位群が高率だが、統計的には有意な差ではない。前報のごとく、役割葛藤項目の中でも、母親役割や妻役割の遂行については、有業者の評価が低いものの、時間管理では無業者の方が評価が低い。つまり、母親の就業という一事だけが総体としての葛藤を生むわけではないと考えられる。そこで、母親の就業の“周辺”を検討して、葛藤を生む要因を探る必要がある。

つぎに、就業している母親の就業理由をみると、葛藤群との関連が強い。母親が就業理由を「生活費の不足を補うため」とするのは、下位群では29.4%であるのに対して、上位群は51.7%にもなる。この結果は世帯収入の多寡とも符合する。

なお、顕著な差ではないが、就業している母親の就業継続意思は、葛藤下位群の方が上位群より「長く続けたい」とする者が多く(29.4%, 18.4%)積極的である。また、母親の就業形態は、葛藤下位群ではパートタイムや自営業がより多く、上位群ではフルタイムが多い(43.7%, 26.5%), という結果が出た。つまり、学齡前の子をもつ母親は、経済的な必要性に迫られて“働く”ことで葛藤を生じやすいということである。

一方、無業の母親の就業意思は、葛藤上位群の方がより積極的である。上位群では、下位群との差は大きくはないが子の数が多く、末子の年齢も低いことから、「家庭に足止め」されている状況もあるとも考えられる。

ところで、母親(妻)の就業に対する夫の態度をみると、夫の大部分7割が妻の就業に

「賛成している」。ただし、下位群では夫が「反対している」ケースが17.8%と上位群11.3%よりも多く、夫の考えが「わからない」のは、上位群が18.3%と下位群6.2%より多い。したがって、母親の役割葛藤を生む可能性は、夫の「反対」よりも、「わからない」という意思の疎通の欠如にあるといえよう。

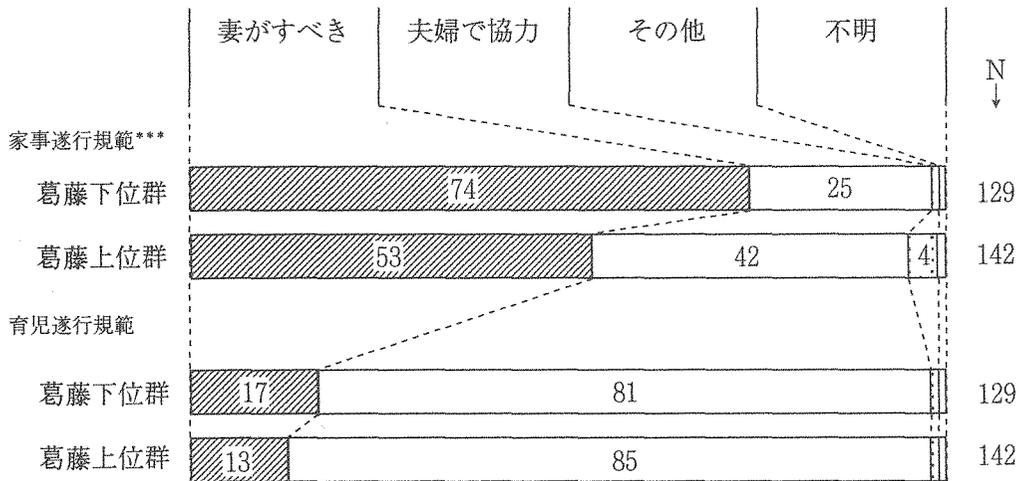
(3) 葛藤群と家事・育児の役割遂行規範

役割葛藤群と家事遂行の規範意識との間には、図3の通り顕著な関連がみられる。まず、家事は「妻がすべき」という母親が多いということが大前提である。その上で、葛藤下位群は「妻がすべき」73.6%、「夫婦で協力して」24.8%である。上位群は、「妻がすべき」52.8%、「夫婦で協力して」は42.3%と下位群よりも夫婦共担意識が進んでいる。

一般的には、家事は「妻がすべき」という性別役割分業観が今なお女性自身にも根強い

ものの、徐々に夫婦で担うという考え方に傾いてきている。ところが、本調査では、葛藤上位群で夫婦共担意識が進んでおり、家事の役割遂行規範が変容する際の困難性が推察される。つまり、夫と共担すべきという規範は、夫への期待を高めるが、夫の家事参加は程度の差はあるものの絶対量は少ないことから、期待はずれ度が大きくなり、この期待はずれが妻の役割葛藤を生む要因となると考えられる⁽⁶⁾。したがって、家事の夫婦共担意識が、母親の役割葛藤に関して好ましくない影響を与えないと思われる。

つぎに、育児遂行の規範意識をみると、葛藤群間の差は極小さい。葛藤下位群・上位群とも、育児は「夫婦で協力して」と8割以上が考えている。育児に関しては、家事とは異なり、一般的にも、子の両親が協力して遂行するものと考えられている。なお、育児遂行



枠内%, 枠外実数
*** P ≤ 0.001

図3 葛藤群別の家事・育児遂行規範

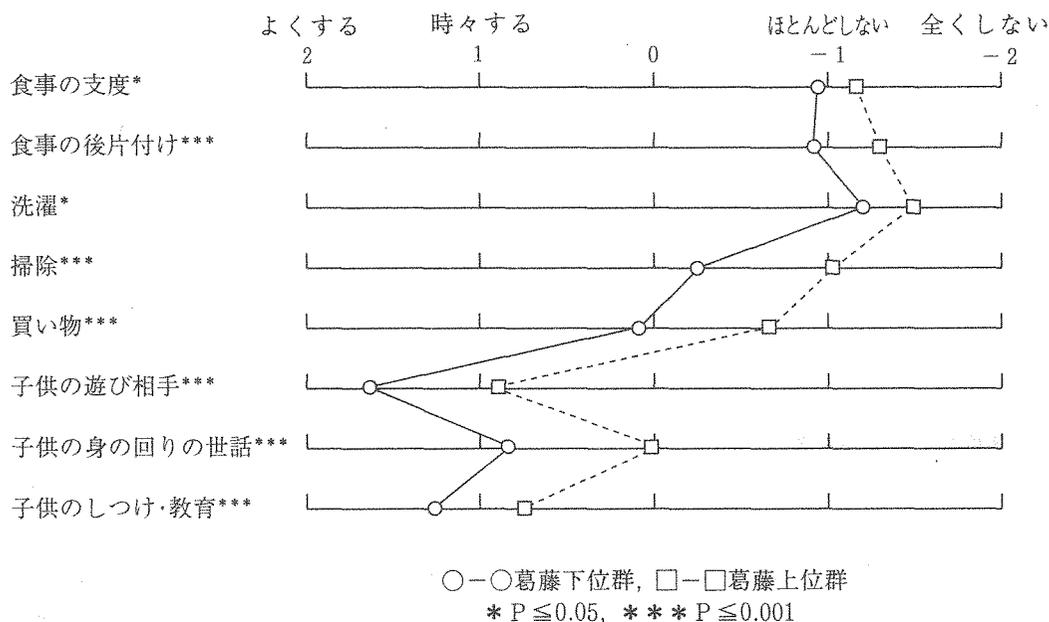


図4 夫の家事・育児参加の程度

の規範意識そのものも、母親の役割葛藤に直接的な影響は与えていないと思われる。

(4) 葛藤群と夫の家事・育児参加

夫の家事、育児参加の程度と葛藤群との関係を図4に示した。

まず、8項目全てについて、葛藤下位群の夫の参加程度が上位群のそれよりも高いことが明らかである。

つぎに、各項目についてみていくと、家事項目の食事の支度、食事の後片付け、洗濯、買い物への夫の参加程度が低いことが顕著である。下位群の場合でも、上位群より高い参加程度とはいえ、両群とも「ほとんどしない」レベルである。したがって、前述の家事遂行の規範意識との関係から推察すると、葛藤下位群の母親は、夫への家事参加の期待は低いことから、期待はずれ度は比較的小さいだろ

うが、上位群では4割強の母親が夫の協力を期待しており、期待はずれ度の大きさは母親の葛藤を生む重要な要因となろう。

なお、本調査の夫の家事・育児参加の程度は、妻による評価であり、夫自身の自己評価や第三者による客観的な評価とはズレがあると考えられる。しかし、本稿では母親の内的役割葛藤を問題にしているため、母親達が夫の家事参加を、中でも日常的・反復性の強い食事の支度・後片付けや洗濯について、「ほとんど」評価していないという事実が重要なのである。

さらに、3項目の夫の育児参加程度をみると、家事よりも両群とも夫の参加の程度が高くなる。特に、子供の遊び相手や子供のしつけのように父親が慣習に照らして参加しやすい項目での参加程度が高い。しかし、下位群

の夫の参加程度の方が、上位群の夫より高いことは家事の場合と同じである。

ここで、前述の育児の役割遂行規範との関係を見ると、両群とも8割の母親が、育児は「夫婦で協力して」と考えており、葛藤下位群では比較的期待はずれ度が小さく、一方、上位群では期待はずれ度が大きいといえよう。したがって、夫の育児参加の程度が低いことは、家事と同様に母親の役割葛藤を生む要因になると考えられる。

(5) 葛藤群と生活満足度

図5に、役割葛藤群と生活満足度の関係を示した。葛藤下位群では、「大変満足」14.0%、「満足」38.0%と満足している母親が5割おり、「普通」34.1%、「少し不満」が9.3%である。上位群では、下位群とは逆に、「大変不満」9.9%、「少し不満」40.8%と不満ありが5割を占め、「普通」31.7%、「満足」12.0%、「大変満足」2.1%である。

葛藤下位群の方が、上位群よりも満足度が高いことは明らかである。つまり、役割葛藤は生活満足度と強い関連があるといえる。しかし、葛藤下位群にも「不満」者があり、上

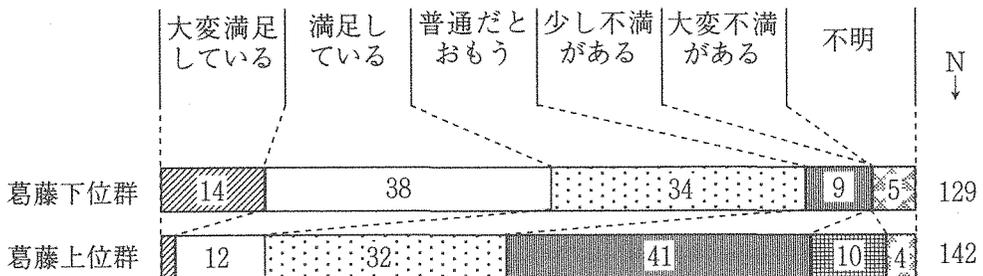
位群にも「満足」者がいる。また、両群とも3割程度の「普通」と思っている者もいる。したがって、役割葛藤が即生活満足につながると断言はできないが、葛藤が少ないことは、より生活満足度を高めるといえよう。

4. 要 約

以上のように、本報では、葛藤下位群と上位群というグルーピングを行なって、役割葛藤の生じる要因を考察した。

まず、母親（妻）や夫の個人的属性である年齢や、学歴、結婚経過年数は、役割葛藤とは強い関連はみられなかった。したがって、「学齢前の子をもつ」家族の発達段階にある母の役割葛藤を生む要因は、その種々の属性にあるのではなく、母親の意識や生活実態の方によりあることを示唆していると考えられる。

第二に、母親の就業に係わる事項についてみたところ、葛藤上位群では下位群と比較して、就業している場合は、「生活費の不足を補うため」という経済的緊要度の高い就業理由を多くの者があげている（51.7%、29.4%）。



枠内%, 枠外実数

$P \leq 0.001$

図5 葛藤群別の生活満足度

この背景には、上位群の世帯収入が下位群より低いということもある。そこで、上位群の就業母の就業継続意思は「長く続けたい」とする者がより少ない（18.4%，29.4%）。また、その就業形態はフルタイムが多い（43.7%，26.5%）。つまり、葛藤上位群では、母親が経済的な“事情”から拘束力のある形で働くことで葛藤を生じているといえよう。

さらに、妻の就業に対する夫の態度・理解をみたところ、葛藤上位群では、夫が妻の就業に賛成している者は下位群と差はないが、夫の考えを「わからない」とする者は多い（18.3%，6.2%）。母親の役割葛藤の要因になるのは、夫の妻の就業に対する不明瞭な態度であり、換言すれば、夫婦のコミュニケーションの欠如⁶⁾である。

第四に、母親の家事・育児の役割遂行で、だれが担当すべきかという規範意識をみた。育児に関しては、葛藤上位群・下位群とも「夫婦で協力して」すべきであると考えているが（85.2%，81.4%）、家事については、上位群の方が「夫婦で協力して」という夫婦共担意識が強い（42.3%，24.8%）。

しかし、この家事・育児の共担意識が役割葛藤を生むのではなく、夫の家事・育児への低い参加程度との期待はずれ度が葛藤を生む要因となると考えられる。夫の家事・育児への参加程度は、家事に関しては特に低く、葛藤上位群では下位群よりもさらに低い。そこで、上位群では、家事・育児について、規範＝期待と夫の遂行との間の差が大きく、これが葛藤を生むといえる。

最後に、生活満足度との関係をみたが、こ

れは明瞭な差があり、葛藤下位群は上位群よりも「満足」しており（52%，14.1%）、「不満」を感じている者は少ない（9.3%，50.7%）。つまり、役割葛藤だけが原因ではないだろうが、葛藤が高いということは、生活満足度に否定的な影響を与えることは確かである。

5. 提 言

以上、「学齢前の子をもつ母親の役割葛藤」について、前報では、就業が母親の役割葛藤にどのような影響を与えているのか、本報では母親の役割葛藤はどのような要因から生じるのかを分析してきた。

前報では、母親は就業することによって、母親役割・妻役割の遂行において葛藤を生じるが、時間の管理という点ではむしろ充実感を感じている、という結果が出た。母親の就業がすでに一般的になっている現在でも、なお、子に対して十分な世話ができない、妻として夫の身の回りの世話が十分にできない、という母親の自己評価は、母親・妻の家庭内で果たす役割モデルの見直しを迫っていると考えられる。また、母親が就業することを否定して母親の生活時間管理は考えられないことも示唆している。

つぎに、本報における分析結果は、学齢前の子をもつ母親にとって、その役割葛藤の要因となるのは、夫婦のコミュニケーションの欠如であり、夫の家事・育児への参加の程度の低さであることを強く示唆している。

つまり、母親の役割葛藤は、例えば、母親が就業することによる自己の多重役割遂行そのものにあるのではなく、就業母、専業主母に

かかわらず、夫がいかに妻とのコミュニケーションをとっているか、加えて、家事・育児にどれほど参加しているかによって生じるといえる。換言すれば、学齢前の子をもつ母親は、夫の具体的な行動としての家庭生活への参加を求めているということである。妻も夫も「家庭と仕事の両立」に向けて夫婦関係の構築を行なうべきであり、これが生活満足につながることも本報告で確認したところである。

題「家族問題の社会学・2」財団法人安田生命社会事業団、p62～63。「何事もよく話し合う夫婦がよい」のかという調査（NHK、1977調査）の結果から、夫は結婚して5～6年たつと、「黙っていても通じ合う夫婦」を理想的な夫婦という思いを強めるが、妻の方は、逆に6～7年たった妻ほど話し合いを求めている（結婚期間6～9年で、夫45%、妻80%）、という指摘をしている。

（1993年7月12日受付）

注・参考文献

- (1) 赤星礼子・金孝心、1993「学齢前の子をもつ母親の役割葛藤（第1報）」佐賀大学教育学部研究論文集 第41集 第1号（II）、p127～137。
- (2) 中間美砂子、1991「夫婦関係」日本家政学会編『家族関係学』朝倉書店、P76。
- (3) 川崎末美、1991「夫婦の人間関係」湯沢雅彦監修『改訂現代社会と家族』建帛社、p63。
- (4) レンジ表

順位	アイテム名	レンジ
1位	妻役割遂行の自己評価	0.2809
2位	夫の家事参加への評価	0.2798
3位	夫の育児参加への評価	0.2547
4位	母親役割の自己評価	0.2542
5位	時間管理の自己評価	0.2519
6位	夫の妻理解への評価	0.2244
7位	人間関係への自己評価	0.2167
8位	才能発揮への自己評価	0.2154
9位	家事遂行の自己評価	0.1641

- (5) 古谷昭、1967「夫婦役割テストによる一般夫婦の分析」小山隆『現代家族の役割構造』培風館、p100～116。夫婦間の役割期待と役割遂行のギャップを、期待はずれ指数としてとらえている。また、妻の夫への役割期待と遂行への評価のギャップの方が、妻の夫への役割期待と夫の遂行への自己評価とのギャップより大きいことを示している。
- (6) 湯沢雅彦、1989『結婚と夫婦をめぐる諸問